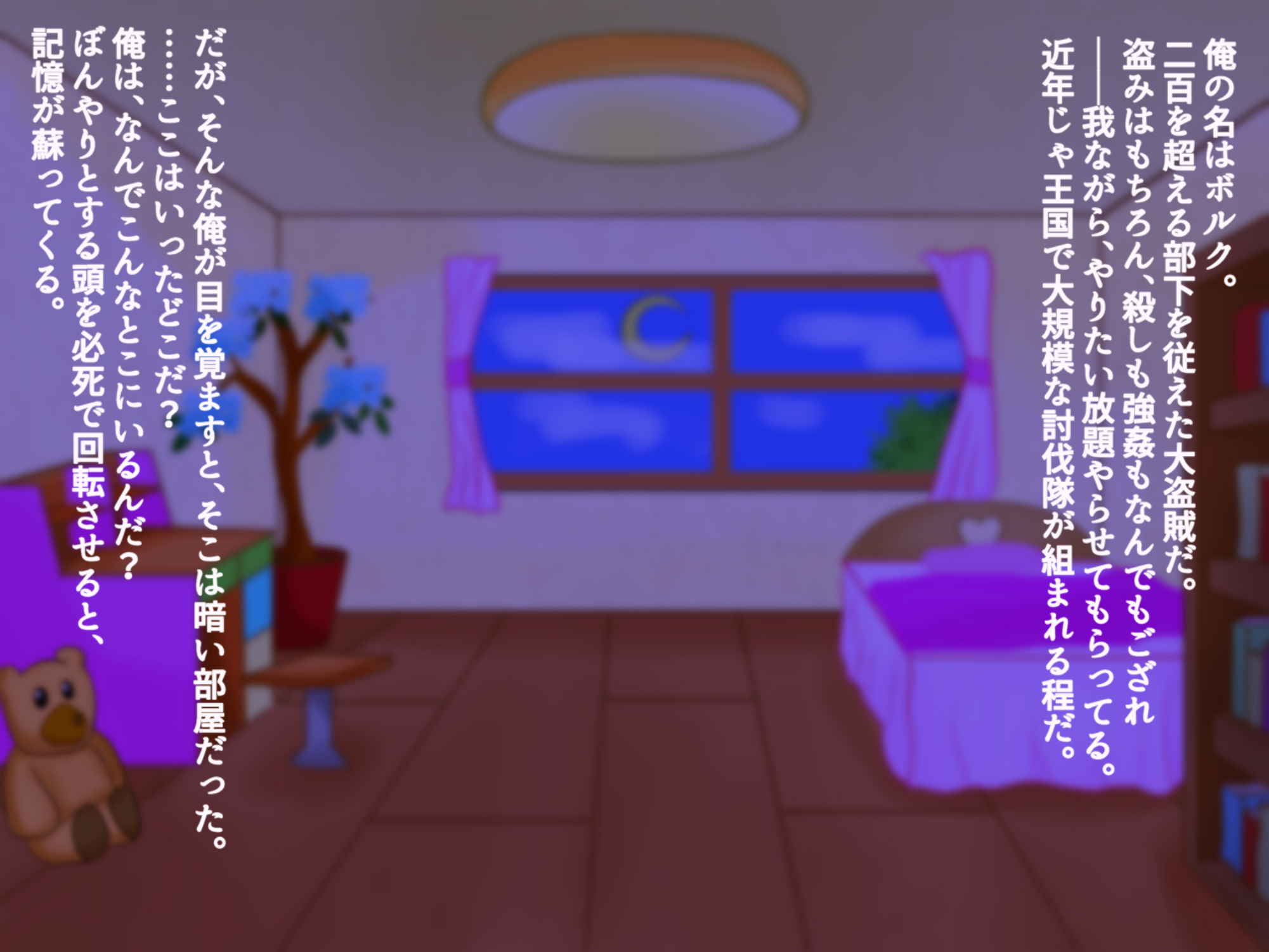
淫魔の絵日記
～ルルちゃんとお散歩～



俺の名はボルク。
二百を超える部下を従えた大盗賊だ。
盗みはもちろん、殺しも強姦もなんでもござれ
――我ながら、やりたい放題やらせてもらってる。
近年じゃ王国で大規模な討伐隊が組まれる程だ。

だが、そんな俺が目を覚ますと、そこは暗い部屋だった。
……ここはいったどこだ？
俺は、なんでこんなとこにいるんだ？
ぼんやりとする頭を必死で回転させると、
記憶が蘇ってくる。

俺はアジトの近くの森で一人のサキュバスを見た。
豊満なバスト、キュッとくびれた腰、いやらしい丸みを
帯びた尻――それは今まで見たことないほど、
魅力的な女だった。

自慢じゃないが俺は女には事欠かない。
悪党とはいえ、この規模の盗賊のボスとなりゃ、
自然と女は寄ってくる。
それに気に入った女は、例え俺を拒絶しようとも
犯し尽くしてやった。
最初は抵抗していたが、最後にはみんな堕ちて、
俺の性奴隷になった。

その中には人間だけじゃなく、エルフ、獣人、ドワーフ、
果てはサキュバスまでいる。
「こいつもその中の一人にしてやる」
俺は舌なめずりをすると、背後からそっと目の前の
サキュバスに近づく。
相手はこちらに気付いていない様だ。
サキュバスごときに負ける俺じゃないが、
事はスムーズに進めた方がいい。
もう相手は目前に迫っている。

しかし、俺の視界はそこで反転する。
いつの間にか俺は地べたに仰向けになっていた。
そして目の前には艶然と笑いながらこちらを
見下ろすサキュバスがいる。

「てめえ！　何をしやがった!?」

恫喝しながら、俺は渾身の力で火炎魔法を放つ。
威力は並の魔術師以上だ。
しかし、サキュバスが軽く手をかざすと、それはあっさりと
かき消されてしまった。
馬鹿な……こんな事、サキュバスごときに出来る訳がない。

『あらあら、元気な人間さんね。
見かけのわりに、魔力も高いのね。
ちょうどいいわ。
あなたを私の娘のペットにしてあげる』

「俺をペットにするだと!?　ふざけるな！」

魔法がダメなら暴力で屈服させる。
今度は先ほどの様に油断などしない。
俺は起き上がると瞬く間に間合いを詰め、
サキュバスに襲いかかる。
拳が腹へと届くその瞬間、サキュバスは指を鳴らした。
その音を聞いた瞬間、俺の意識は闇に堕ちた。

「くそ、思い出したぞ！
あの女、ただじゃおかねえ！」
俺は拳を壁に叩きつける。

――とはいえ、馬鹿正直に正面から挑んでも、
この前の二の舞だ。
「何か策を立てないとな……」
俺は改めて周囲を見回す。
目が暗さに慣れてきたので、さきほどより詳細に観察できた。
そこは小ぎれいで裕福そうな部屋だった。
部屋にはベッドや小さな机、本棚などが置かれている。
それは貴族が使う家具ほど華美な装飾が
施されているわけではない。
しかし、それらを構成する素材は驚くほど
精巧に加工されている。
それに家具の大きさやぬいぐるみなどの小物を見る限り、
ここは小さな子供の部屋なのだろう。
子供の部屋にもこれだけのものを用意出来るなど平民では
ありえない。
そもそも子供部屋を持ってる家庭は珍しいくらいだ。

「ここが、あの女が言ってた娘の部屋か？」
俺は舌打ちをする。
「あの女、俺をガキのペットにするなどとふざけたことを
ぬかしていたな」
腹立ち紛れに床に置かれたクマのヌイグルミを蹴り飛ばす。

その瞬間、ガチャっとドアが開く音が響いた。

カチッと音がなると急に部屋が明るくなる。
そして、俺の目の前には一人の美少女が現れた。
これがあの女の娘だろうか……
美少女にはサキュバスの証である角も尻尾もない。
まだ、子供だからだろうか。
「おじさんが、ママの言ってた私のペットになってくれる人？」
不安そうな顔で言う少女。
「いや、たしかにお前の母親に無理やりつれて来られたが、ペットになんか――」

「わあ！　やっぱり、おじさんがペットなんだ！
私、ルル！
これからよろしくね！」
俺の言葉を最後まで聞き終えず、ルルと名乗った少女は
嬉しそうに笑う。
「頭ツルツルだね。　ファッション？
あ、この蛇さん、可愛いね？」
ルルは俺のスキンヘッドやそこに掘られた蛇の入れ墨に
興味津々の様だ。
無遠慮に触ろうとしてくるルルに苛立ちを覚える。
「あ、そうだ。
ルルね、おじさんの為にかわいい首輪用意したんだ！
ちょっと待っててね？」

「ベッドの下に隠してたんだ！」

ルルはそう言ってベッドの下に手を突っ込み、
その奥を探り始めた。
（音鳴だと？　ノのガキ、完全に俺をペット扱いしやがって……）
こんなガキにも舐められているという事実に
再び怒りが湧いてくる。

目の前でフリフリと揺れる
ガルルの尻に俺は舌なめずりをする。
ガキで全然タイプではないが、
自分の立場を分からせてやるのも
悪くない。

「あー！　見つけたよ！
……おじさん？」

「ルルー！　何するの！」
俺は強引にルルのスカートと下着を剥ぎ取った。
ルルの白いツルンとしたお尻が露わになる。
「はー！　その言葉はなー！　お前が付けるんだよー！」

「やめて～　言葉にならない～」
「ごめんなさい～」
バチン！
「ひゃあ～」
俺は思いっきりルルの尻を叩いてやった。
ルルは目に涙を浮かべている。
「てめえみたいなガキが
この大盗賊ボルク様をペットに
するだあ？　どっちがご主人様か
教えてやるよ！」
「な、何をするの……？」

「こうするんだよー」
「ひやああー　痛いー！
なにこれ？
この太くて痛いのなに？」
「はあ？　チンポだよ。チンポ。
お前サキュバスだろ？
なんで、そんな事も知らないんだ？」
「ごめんなさい」
「まあいい。お前のママの
代わりに教えてやるよ。
コイツはな、こうやって、お前の
穴にぶち込むことで
お前に雌の幸せを
教えてくれるモノだ。
その代わり、これからお前は
一生コイツに奉仕するんだぞ」
「そんなのやだ……」
「聞き分けのないガキだな。
なら大人として躾けてやるよ……」

『こんなふうにな！』
「ひやあああ！」

「おら、どうだ！
初めて味わうチンポの味は!?」
「ひぐぅ！　苦しい！
痛いよ！」
俺が腰を打ち付けるたびに
ルルは苦しそうに悲鳴を上げる。
「すぐに良くなってくるぞ！
なんせ俺はサキュバスだって
このチンポで堕とした
男だからな！
お前も性奴隷にしてやるよ！」
「やだ！　そんなのやだ！」
「お前が嫌でもそうなるんだよ！」

「お!? 嫌だって言ってる割にはもう濡れて来てるじゃねえか!? さすがサキュバス、体は淫乱だな！」
俺の言葉通りルルの膣はヌレヌレで俺のチンポをギュウギュウと締め付けてくる。
「え!? なにこれ!? 変な感じがする!?」
「これはな！ お前が俺のチンポを気に入ったって証だ！ これならお前が俺の性奴隷になるのに一週間もいらねえな！ へへ、お前を堕とした後はお前のママを堕としてやるよ」
「やめて！ ママにひどい事しないで！」
「やだね！ あいつには借りがある。それにお前みたいなチンチクリンのガキ犯すより、あのドスケベボディを犯したいんだよ、俺は！」
「ルル、チンチクリンなんかじゃないもん」

「いっちょ前にムカついてんのか!?
だったら男への奉仕を覚えなきゃな。
安心しろ、俺がタップリおしえてやるよ！」
『あ!? ダメ!?
また激しくなった！
なんかだんだん気持ち
良くなってくるぅ!?」
「へへっ！ いいぜ！
存分に気持ち良くなれ！
そうすれば、すぐに俺に
奉仕する喜びに目覚めるはずだ！」
「あ！ ああ！
スゴイ！ ズンズンくるぅ！」

「オラ！　思いっきり出してやるぞ！」
俺は思いっきりルルの膣内に射精した。
「あ!?　あああ！」

「ぢゅ゛ぢゅ……」
ルルは膣から精液を垂らしながら
放心している。
「これからたっぷり犯してやるから
覚悟しろよな！」

それから俺とルルの調教生活が始まった。
「よお、お帰り」
「……た、ただいま戻りました。ご主人様」
学校から帰ったルルを俺は全裸で迎えた。
「ちゃんと挨拶出来るようになったな？
じゃあ、帰ってきたら何をするかも分かっているよな？
あと、ペットにふさわしい姿があるんじゃないか？」
「うう……」
ルルは服を脱ぎ、首輪を付ける。
そして、俺の前に跪いた。

「ご主人様、ご奉仕させて頂きます」
うやうやしく挨拶するとルルは
俺の肉棒をつかみ舌を這わせ始めた。

「ん、ちゅ、ペロ、レロレロ、んん。
ご主人様気持ちいですか？」
「ああ、なかなかいいぞ？」
ルルはサキュバスだからか、ちょっと教えただけでも、
チンポを喜ばす奉仕が出来る様になった。
正直、コイツは母親の方を堕とす為に性奴隷に
するつもりだったが、今では調教そのものを楽しんでいる
自分がいる。
「そろそろ口で咥えてもらおうか？」

「失礼します。ご主人様。はむ」
ルルは俺の肉棒を咥えると頭を前後に動かし始めた。
肉棒に心地よい快感が走る。
「いいぞ。上手になったな？」
「ありがとうございます」
「じゃあ、もっと早く動いてみろ？」
ルルは頭を動かすスピードを上げる。
しかし、それは満足いく速さではなかった。

「それじゃダメだ。こうやるんだよ！」
「むご、むごご！」
俺はルルの頭を掴むと
思いっきり前後にふった。
苦しそうなルルの声が室内に響く。

「いいか。俺のチンポに奉仕するなら、
これぐらい出来なきゃダメだぞ？」
「むご、むごもご」
ルルは目に涙を溜めながら、俺の行為に耐えている。
「よし、じゃあ今度は自分一人でやってみろ？
上手く出来なければお仕置きだぞ？」
俺が握った拳を見せつけると、ルルはさっと顔を青くする。

「一生懸命奉仕します！　だから、痛いのはやめて下さい。」
ルルは頭は頭を思いっきり前後にふった。
先ほどとは比べ物にならない快楽が俺の肉棒を包む。
やはり成長が早い。
「いいぞ。その調子だ。やれば出来るじゃないか」
「むご、むごごご」
ルルはこころなしか嬉しそうな笑みを浮かべた様に見えた。

「ふが！　ふご、もご！」
激しいストロークに俺は一気に絶頂まで導かれる。
「出すぞ！」
「むごごご！」
ルルの口内に大量の精液が放出される。

「んん！　ゴク！　ゴク――ぷは！」
ルルは俺の精液を飲み込もうとするが、むせて吐き出してしまう。精液が落ち胸のあたりを汚す。
「ごめんなさい！次はちゃんとするから殴らないで！」
怯えた顔で謝罪するルル。しかし、俺はそんなルルの頭を撫でる。
「そんなことはしない。お前が頑張って飲もうとしていたのは分かってるからな……」
「あ、ありがとうございます！」
媚びた目で俺を見上げるルル。暴力と恐怖だけではなく、適度に評価や労いを続けることで、相手は従順になっていく。いわゆる飴と鞭だ。
単なる性奴隷候補相手なら、普段そこまで手はかけないのだが、どうやら俺はこのルルというサキュバスを気に入ったらしい。

「だが、失敗は失敗だ。
お仕置きは必要だな……
こっちへ来い」
「はい。ご主人様」
困った様な表情を浮かべつつも顔を上気させるルル。
お仕置きがどんなことを意味するか理解しているのだろう。
まったく、躾けがいのあるガキだ。

「どうだ？　デカいだろ？
これがお前の中に入るんだぞ？
嬉しいだろ？」
「は、はい。ご主人様、ありがとうございます」
不安そうな顔のルル。
まだ、チンポへの恐怖の方が勝るか……
だが、すぐに夢中にさせてやるからな。
「さあ、自分でチンポを咥え込むんだ」
「はい。ご主人様」

ルルのマンコの中に俺のチンポがメリメリと入っていく。
生暖かくギュウギュウに締め付けてくる膣の感覚に
俺は思わず息をつく。
「あ、あああ！　大きい！」
苦悶とそして若干の快楽の混じった声に俺の股間が
さらに硬くなる。
「いくぞ！」

俺は激しく腰を動かし、ルルを突き上げる。
「うぐぅ！　ああ！　激しい！」
俺の動きに合わせルルは苦悶と快感の混じった声を上げる。
「う！　やめぇ！　ひぐぅ！」
「なんだ？　やめろってか？　俺に奉仕するのは嫌か？」
「ううん！　違います！　ひぐぅ！
ルル、嫌じゃない。　あああ！　一生懸命奉仕します！」
ルルは怯えた顔で自身も腰を激しく動かす。
「ははは、やっぱりお前の膣中はキツキツで気持ちいいな！
だが、もっと締められるんじゃないか？」
「え!?　もう無理……　ああ！」
「おいおい？　すぐに諦めるな。
仕方ない俺が手伝ってやるよ」

俺は腕を十字に組んでルルの首を締め上げる。
「ぐぅ！　ぐぐぅ！　ぐるじぃ！」
目を白黒させ苦悶するルル。それと同時にルルの膣が俺のチンポを締め付ける。
「おお、いいぞ。　これじゃすぐイっちまうわ」
「じゃあ、このまま動くぞ」
「!?」

俺は再び、ルルを激しく突き上げた。
「うぐぅ！　ぐぅ！　うぐぅ！　ぐぐぅ！」
「はは！　マジでスゴイ締め付けてくるな！」
「おご！　んぐぐ！　ひぐぅ！」

ルルの膣圧にやがて俺のチンポが限界を迎える。
「出すぞ！　受け取れ！」
「うぐぅぅぅぅぅぅぅ！」
大量に放出された精液にルルも絶頂した様だ。

精液を受け止め、浅く息をするルル。
「いいか。今のチンポ締め付ける感覚覚えておけよ？
出来なかったら、また首絞めるからな？」
「わ、わかりました……　次からちゃんとやります……」

「ご主人様、ご奉仕させて頂きます♡」
熱を込めた視線で、うやうやしく挨拶するとルルは
俺のチンポに舌を這わせ始めた。

「ん、ちゅ、ペロ、レロレロ、んん。ご主人様気持ちいですか？」
「ああ、相変わらず上手いな。舐められているだけでイっちまいそうだ」
「喜んでいただけて嬉しいです♡」

あれから一週間経ち、すっかりルルは従順になった。
暴力で脅す必要もなく、自ら進んで奉仕を申し出るようになっていた。
「ご主人様。そろそろこの逞しくて素敵なオチンポ様をルルのおしゃぶりで気持ち良くして差し上げたいのですが、よろしいでしょうか♡」
こんなふうに俺を喜ばせる口上も自分で考えて発する様になっていた。

「いいぞ。　お前の思うまま奉仕してみろ」
「ありがとうございます♡　ご主人様♡」
ルルは俺のチンポに勢い良くしゃぶりつくと、下品な音を立てながら、ご奉仕フェラを始めた。
「ん、じゅる、ちゅぱちゅぱ、じゅるうう♡」
股間を包む快楽に俺は恍惚となる。
「いやあ、まじで上手くなったな、ルル！
正直俺の雌奴隷の中でお前ほど上手いヤツはいないぞ！」
「じゅる。　本当ですか、ご主人様ぁ？　じゅるるう♡
ん、ルル嬉しいです♡　ちゅぱ♡」

「いやあ。　マジだって！　もしアジトに戻っても、一日中多分お前ばっかり犯すと思うわ！」
「あは、一日中？　想像しただけで濡れてきちゃう♡」
ルルは俺の言葉に気を良くしたのか、さらに勢いよくフェラを続ける。勢いだけでなく、テクニックもある。ちゃんと俺のチンポが気持ちいい部分を責めてくる。
「ん、じゅる、美味しっ♡　じゅるうう♡」
「うおお！　ヤベ！　もう出そうだ！」
「ご主人様ぁ♡　ちゅる、出して♡　出してぇ♡」

「うおおおお！」
「むごごごご♡　ごきゅごきゅごきゅ♡」
俺はルルの口内に勢いよく射精した。
以前は精液をこぼしていたルルだが、
今では一滴残らず
飲み干す様になっていた。

「ご主人様♡　キレイに飲み干しましたぁ♡」
「おお、偉いぞルル」
俺は口の中を見せてくるルルの頭を撫でる。
はにかむ様に笑うルル。
その姿を見ると思わず再び股間が硬くなる。
「ルル。今度はそのロリマンコに奉仕させてやるぞ！」
「わあ、ありがとうございます、ご主人様♡」

部屋の灯りを消し、ベッドに寝ころんだ俺は
ルルを体の上に乗せる。
ルルの染み一つない華奢な体は
窓から差し込む月明りを
後ろに神秘的な様相を見せていた。

その姿に元気を取り戻したチンポをルルに見せつけた。
「わあ、ご主人様のオチンポ、一回出したのに、もうこんなにガチガチ♡」
ルルは蕩けた表情で俺の肉棒を見つめる。
「ご主人様、それではルルのヌレヌレロリマンコでご奉仕させていただきます♡」

ルは俺のチンポを咥え込んだ。
「ああん♡　ご主人様のガチガチオチンポやっぱりスゴイ♡」
恍惚とした表情でつぶやくルル。
そのマンコはギュウギュウと
俺の肉棒を締め付けた。
以前、首を締めた時以上にキツく
締め付けてくる。
まったくコイツの
エロ方面の成長には
目を見張るものがある。

「それじゃ動きますね？」
ルルは俺の上で激しく腰を上下させる。
「あん、ご主人様あ、ルルのおマンコ気持ちいいですかぁ？」
「ああ、すごくいいぞ！他の性奴隷どもにも見習わせたいわ！」
「やん、ああん♡ルルそんなにいいですか？」
「ああ、お前に比べりゃ、他の性奴隷どもはカスみたいなものだ！　あんなので満足してたなんて自分が恥ずかしいぜ」
多少のリップサービスは含まれているが、俺にとって、この小さな性奴隷が一番のお気に入りになっていた。

「やん♡　そうなんですかぁ？
じゃあ、ご主人様をそんな気持ちに
させちゃうダメダメなセンパイに
代わって――ああん♡
ルルがご主人様を幸せ
にしちゃいますね♡」
「ルルはそう言うと、
さらに腰をくねらせ、
俺の肉棒を追い詰める。
「イキそうだ！
どこに欲しい!?」
「あ、あん、ああん♡
もちろん、中に――
中に欲しいです♡」
回答も完璧だ。
俺はラストスパートをかける。

「きゃ、あん、ああん♡
ご主人様激しい！
しゅごい♡」
「出すぞ！　おらぁ！」
俺はルルの膣内に
思いっきり精液を放つ。
「あ、ああー♡
ご主人様の温かいので
満たされるぅ♡」

「気持ち良かったぞ！　ルル！
アジトに戻ったら、
一番の性奴隷にしてやるぞ？」
「ありがとうございます♡
あ、でも、あの――？」
ルルは恍惚の表情から一転、
不安そうに口ごもる。
「なんだ不満か？」
「いえ、あの、ご主人様は
ママのことも性奴隷にする
つもりですよね？
ママがいるのに私が
一番になれるの
かなって思って――」
たしかにルルの母親を堕として元の世界に戻るのが、
一番の目的だった。それ自体は忘れてはいない。
だが、すっかりルルとのセックスに夢中で後回しになっていた。
以前は俺に屈辱を味合わせたあの女を犯したくて
仕方なかったが今は、そこまで執着はない。
かなりタイプの女だったにも関わらずだ。

「いや、正直お前のママを
堕としても、お前が一番かもしれねえな。
まあ、お前が俺の性奴隷としての
努力を怠らなければだがな」
ルルの評価をしつつも、驕らせない様、
釘を差しておく。
これも性奴隷を躾けるコツだ。
「ありがとうございます。
じゃあ、今はママよりルルに
夢中なんですね？」
そう言うルルの様子に
違和感を覚える。
「ん？　ああ。
だが、さっきも言った通り
努力を怠るなよ。
ほら、ボウっとしてないで、
もう一回するぞ！」
俺は違和感を振り払う様に激しく腰を振った。
まだルルとセックスしたかったというのもある。

「そっかぁ、おじさんは
ママよりルルのことが
好きなんだね？
じゃあ――」
俺がルルの物言いの
おかしさに気付く前に
良く響く声でルルは
つぶやいた。
「ストップ」

ルがつぶやいた瞬間、
俺の体が石の様に動かなくなる。
力を込めても、魔力を込めても、
びくともしない。
「おい、ルル！
いったい何をした！
それにお前、俺のこと『おじさん』って――」

「ふふふ。ルルの家系にはね。
自分に欲情した人間を操る
固有魔法があるんだよ。
強力な力だから、一族でも使えない淫魔は
いるんだけどルルはその力を多く
受け継いでるらしいの。
ママは私の能力のことをこう呼んでる」
「絶対服従」
パーフェクトオーダー
「だからね。
おじさんみたいにルルにちょっとでも欲情した人は
ルルには絶対に逆らえないんだよ」

「絶対服従だと!? ふざけるな！
こんなことして、いったいどういうつもりだ!?」
「え？ だって、おじさん、すぐ暴力振るうじゃん。
ルル、大人の腕力には勝てないから、
おじさんの動きを止めただけだよ？」
「じゃあ、今まで俺に従順だったのは
この術をかける為か？」
「あはは！
違うよ。この術はおじさんが
最初にルルのこと犯した時に
はかけられたよ？」
「じゃあ、何の為に
今まで犯されてた？」
「だって、おじさん、最初会った時ママに夢中だったでしょ？
ちゃんとルルのペットになってもらう為にはまず
ルルの良さを分かって貰わなきゃって思ったから……」

「その術使えたら、無理やり俺をペットにできただろ？」
「そんなの、ただのズルじゃん。
そんな恥ずかしいことしないよ？
自分の魅力で、おじさん本人からルルのペットになりたいって、
思ってもらわなきゃ意味ないでしょ？」
「は？　自分の魅力だ？
お前らサキュバスはよくチャームの
魔法を使うじゃねえか？
よく考えたら、俺がこんなガキに
ここまでムラムラするわけがねえ！
おい、恥ずかしいと思うなら、
術を解け！」
「おじさんの世界のサキュバスと
一緒にしないで。
ここ以外のサキュバスは人間が周りにいっぱいいるから自分を
磨く必要がなくて堕落してるって
学校の先生が言ってたよ？」
「俺は本気でコイツに夢中になってた？」
ルルのいうことは認めたくない。
だが、魔法の扱いにも長けた俺ならチャームを使われれば、
さすがに気付くはずだ。

「……じゃあ、俺に堕とされて奉仕してたのは演技だったのか？」
「そうだよ？」
「俺は何十人もの雌を堕としてきた男だぞ……その中にはサキュバスだっていたんだ……」
「おじさんの世界のダメダメサキュバスだよね？」
「嘘だ。俺がこんなガキ一人堕とせないなんて……」
その言葉を聞いてルルはニッコリ笑った。
「大丈夫！　ルルのペットになったら、一緒にエッチの練習してあげるから！」
「!?」
俺の中で何かがブチリと切れた。

「ふざけるな！
くそ！　動け！　俺の体！
くそ！　魔法も使えねぇ！」
「ダメダメ。
ルルに危害を加える行為は出来ないよ？」
「てめえ、堕とすのに魔法は使わないって
言ったじゃないか！
この魔法を解け！」
「これはおじさんの暴力を封じる
為のモノだから別だよ？
あくまでおじさんの身も心も
ルルのモノにするのは
ルル自身の魅力でやるって話だよ？」
「……俺をどうするんだ？」
「何もしないよ？
ルルはおじさんがペットになるのを待つだけ……
あ、ちょっとだけイタズラしちゃうかもしれないけどね♪」
ウィンクしてくるルルに思わず可愛いと思ってしまった。
（いや、何考えてる俺、こんなガキに舐められてたまるか！）

『は！　だれが、お前みたいなガキのペットになるか！』
『なるよ？　だって――』
突然ルルの周囲に黒い靄が発生する。
それに伴い、俺は不気味なプレッシャーを
感じていた。

「私はサキュバスで、
おじさんは人間の雄だから」
「!?」

人間にしか見えなかったルルにサキュバスらしい角が生えた。
いや角だけじゃない。羽も尻尾もだ。
そして雰囲気にも妖艶さが増している。
「おじさんはこれから、ルルとのエッチ禁止♪
でも、もしルルのペットになってくれるなら、
好きなだけエッチさせてあげるよ♡」
「だ、誰がなるか……
俺は自分の世界に帰るんだ……」
そう返す声はひどく
弱々しいものになっていた。

「じゃあ、ゲームをしよう？
おじさんがこれから一週間ルルのペットにならなかったら、
おじさんの勝ち。
ママに言っておじさんを元の世界に返してあげるね？
で、一週間の内におじさんに心の底からルルのペットに
なりたいって思わせたら、ルルの勝ち♪」

普段自分が雌どもにやってる様なことをされて妙な気分だが、
これは有利だ。
何せ相手は俺とセックスしないつもりなんだからな。
しかも勝ち負けは実質俺が決められるようなものだ。
いくらなんでもこの条件で一週間耐えるなんて
簡単過ぎだろう。
もうサキュバス親子を堕とすのは諦めた。
一刻も早く元の世界に戻ることが優先だ。
「いいぜ？　乗ってやるよ」
「やった♡
じゃあ、ゲームは明日の朝からね？
というわけで――」

ルは激しく腰を振り始めた。
挿入されたままの肉棒をとてつもない快感が襲う。
『おい!? どういうつもりだ！
セックスはしないんだろ!?』
『ゲームは明日の朝からって
言ったでしょ？
これはエッチ納めだよ？
しばらくルルとエッチ出来ないから、
これからムラムラしないように、
今の内に堪能した方がいいよ？
あ、でもおじさんに
根性なかったら、
すぐエッチできるか♪』
馬鹿にするルルの言葉に怒りを覚えるが、
その感情はすぐに霧散する。
俺の上で激しく腰を振るルルがもたらす快楽が
頭まで浸食してきたからだ。

今までででも充分気持ち良かったルルとのセックス。
だが、これはさらに輪をかけて気持ち良かった。
「お!?　くそ！　おおおお!?」
「ほら、今までのお遊戯セックスじゃないよ♪
もし、おじさんがルルの
ペットになってくれたら、
毎日これが味わえるんだよ？」
いつの間にか体が
動くようになっていた。
だが、俺はルルのもたらす
快楽に耐えるのに精一杯で、
暴力での反撃も、
肉棒での報復も
出来なかった。
「これから一週間頑張れるようにいっぱい射精しとこうね？
おじさん！」

「あ、もう終わりだね？
じゃあ、いっぱいぴゅっぴゅしてぇ♡」
「おおおお!?」
ルルの宣言通り俺は射精した。
もう三回目だというのに、
今日一番の量を放出していた。
「もしかして、今ので
もうルルのペットに
なりたくなっちゃった？」
「な、ならねえよ」
やっとの声で返す俺に
ルルは破顔する。
「良かった。
ゲーム始まる前に終わっちゃうと、つまんないものね」

「そうだ、一つ言い忘れてたけど、ルルのペットになったら、主従契約を結ぶんだけど、それやるとおじさん、ルルに寿命を吸われるからね」
「は!?」
サキュバスが性交で体力や魔力を吸うのは聞いたことがある。
だが、寿命を吸うことが出来るなんて聞いたことがない。やはりこの世界のサキュバスは規格外なのか。
「でも、ルルから強制的に吸ったりはしないよ。ルルはおじさんが寿命吸って欲しいって思った時しか吸わないから」
「寿命吸って欲しいなんて思うやついねえだろ!?」
「ん～、一応主従契約結んでれば、サキュバスに寿命を吸ってもらおうとすると、もう勃たないくらい頑張ったオチンチンでもすぐに元気になっちゃうっていうメリットがあるんだよね。でも――」

「おじさんは、そんなの関係なく、ルルに食べて欲しいって思うようになるよ♡」
「馬鹿が！　なるかよ！
寿命吸われることなんか言わなきゃ、
もっと有利になってたのに
やっぱり頭はガキだな！」
「だって、最初に言っとかなきゃ、不公平でしょ？
それに、ルルは、全てを知った上で、
おじさんに自ら進んでルルのペットになって欲しいんだもん」

「おじさん、覚えておいてね？
人間の雄はサキュバスがいないと本当の幸せを
手に入れることは出来ないんだよ？」
「おじさんはもう逃げられない。
だって、幸せから逃げたい人なんて
いないでしょ？」
艶然と微笑むルルの言葉に
俺は総毛だった。
この時、俺はこの小さな
サキュバス相手に本気で
恐怖と、そして欲情を
覚えていた。
こうして、俺とルルとの
ゲームが始まったのだ。

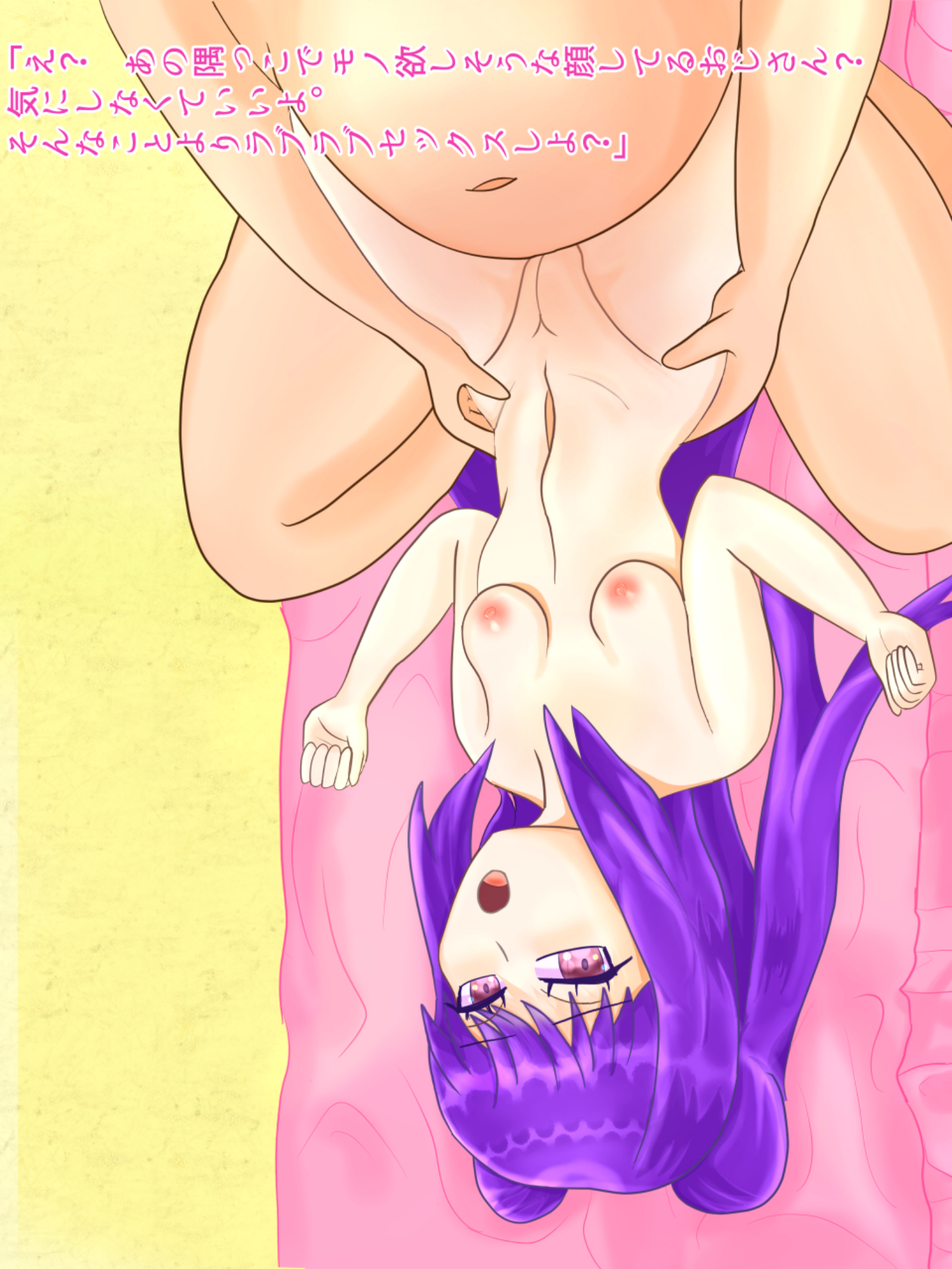
○月21日
今日はおじさんに、ネタ晴らししました。
ルルが奴隷になったと思っていたおじさんは、とても怒ってたけど、パーフェクトオーダーがあるからぜんぜんこわくありませんでした。
だまされてた時のおじさんは、ごしゅじんさまぶってて、かわいかったけど、それも今日でおしまいです。
明日からはルルがごしゅじんさまだって、おじさんとおじさんのオチンチンにおしえてあげなきゃね。
がんばるぞ☆

試し読み版をご利用頂き、ありがとうございます。

ひとまずはここを区切りとさせて頂きます。
ここまでで、基本CG換算で全体の6分の1ほどとなります。

次ページからは本編の序盤～中盤のシーンを抜粋しています。
購入可否の判断に役立てて頂ければと思います。
セリフはシーンの雰囲気が伝わるよう書かれているので、
製品版での記述とは多少異なります。

「ほーら、パンツのクマさんが、
ハチミツよりドロドロのおじさんザーメン、
飲みたいって言ってるよ？」


「え？　あの隅っこでチン欲しそうな顔してるおじさん？
気にしなくていいよ。
そんなことよりラブラブセックスしよ？」

「ルルみたいな小さな娘に足に大チンチン挿られて
興奮してるんだ？
変態だね？」

「こうやって、ルルのおマンコで栓してあげれば、
お風呂の中で、白いのお漏らししても、大丈夫でしょ？
あ、もう出ちゃいそうなの？」

「うわぁ、ガチガチだね？
水着に興奮してるの？
それとも日焼け？
え？　角と羽も
出して欲しい？
マニアックすぎだよ♡」

「どうして、ルル以外の
サキュバスに勃起したの？」